

自然と歩む。

化女沼のラムサール条約登録から10年、その歴史とこれからを考えます。

水鳥の聖地「化女沼」には、希少な植物や生きものがたくさん暮らしています。この豊かな自然を守り、人と共生するために、保全活動や環境教育を行う人や、動き出しているプロジェクトがあります。

市民の憩いの場所でもある化女沼について、さまざまな動植物と今後を探りました。

化女沼の概要

- ▶ラムサール条約の登録面積：34ha (湖面部分)
- ▶生物相：鳥類120種以上、植物650種以上
特にガン・カモ類の越冬数が非常に多く、ピーク時は約4万羽がねぐらとして利用
- ▶ラムサール条約登録年月日：平成20年10月30日

化女沼の歴史

古川地域の北西に位置する化女沼は、丘陵地と平野部が出会うところにあります。ここは、県北部や秋田県・山形県から流れる追川や江合川などで形成されている低湿地帯です。

化女沼は、昔からかんがい用ため池として維持され、古川地域や田尻地域の水田に用水を供給してきました。現在の化女沼は、治水ダム湖として、約300年前につくられた農業用ため池と自然の沼を造成し、平成7年に完成しました。雨水と湧水、洪水時の導水を貯水することで、農業用水の確保と洪水調節の役割を担っています。

多様な植物たち

夏には、ハスやヒシを中心とした水生植物が沼の広い範囲に咲き、沼の周辺には、ニッコウキスゲやノハナシヨウブなどの花が咲きます。中には、国内ではほとんど見ることができなくなった稀少種も多く見られ、化女沼やその周辺には、およそ650種類を超える植物が確認されています。

昆虫類も多く、特にトンボ類の宝庫で、チョウトンボなどたくさんの種類を見ることができます。

水鳥の聖地として

水鳥の生態系にとって、たくさんの種類の植物や昆虫は、命をつなぐとても重要なものです。このような自然環境に支えられて、化女沼には、マガン、ヒシクイ、オオハクチョウなどのガンカモ類が、越冬のため毎年4万羽超も訪れます。これまでに、120種を超える鳥類が確認されてきました。

マガンやヒシクイは、越冬のためにロシアから、約2、4千キロの旅をやってきます。現在では、マガン、稀少なヒシクイの重要な越冬地となっています。マガンは日本へ飛来する群れのほぼ全数が、化女沼や蕪栗沼・周辺水田(田尻地域)、伊豆沼・内沼(栗原市・登米市)などで越冬するといわれています。

化女沼にはヒシクイが多く、蕪栗沼・周辺水田にはマガンが多く飛来しています。マガンは年間20万羽ほど国内に

飛来するのに比べ、ヒシクイは、わずか数千羽ほどしか飛来しません。また、飛来地もマガンに比べると非常に数少ない野鳥です。そのヒシクイが化女沼で越冬することは、地域や市が誇れることのひとつです。

化女沼の世界的価値

そうした渡り鳥が選んだ聖地であることが評価され、平成20年10月、化女沼はラムサール条約湿地に登録されました。

ラムサール条約は、水鳥の生息地として重要な湿地の「保全・再生」「ワイズユース(賢明な利用)」「交流・学習」を目的とした国際的な条約です。昭和55年、北海道釧路湿原が、日本で初めてラムサール条約に登録され、現在までに52カ所(平成30年12月現在)が登録されています。

国内には、湿原や湖沼、藻場、干潟、マングローブ林、サンゴ礁、地下水系などの登録地があり、世界的にも湿地生態系の多様性が評価されています。県内では、化女沼や蕪栗沼・周辺水田(平成17年登録)、伊豆沼・内沼(昭和60年

登録)のほか、平成30年10月には南三陸町の志津川湾が登録されました。

自然と人の共生を探る

化女沼は市街地や東北自動車道からのアクセスが良く、国指定史跡宮沢遺跡にちなんだ古代の里公園もあることから、多くの人にとって身近な存在です。遠足やレジャーなど、個人・団体問わずさまざまな利用ができます。

化女沼がラムサール条約に登録されて10年。大崎に暮らすわたしたちには、化女沼の湿地生態系を維持すること、そして、それらがもたらす恵みを持続的に活用していく使命があるのではないのでしょうか。「豊かな自然」とは、古くから自然に良い形で人が手を加え、自然と共生する文化が根付いてきたからこそ、実現したものです。

化女沼を豊かにする動植物や保全活動に取り組む人々、この環境だからこそできる子どもたちの環境教育、わたしたちができることに目を向けてみませんか。

50年先、100年先も、自然と人が共生し続けるために。